

みえてきた！ 未来につながる地域の居場所
プラス

コロナ禍を経て、 変わらないこと・変えること。

東京ボランティア・市民活動センター 発行 2022 . 07

2020年初頭、新型コロナウイルスの感染が初めて確認されて以来、2年半余りが経とうとしています。当初は未知のウイルスのため生活のあらゆる面で自粛が求められましたが、検査やワクチン接種などの医療的対策、マスク着用や手指消毒、会食時や集会の際の留意点など、私たちはコロナ禍の中でも日常生活の質を維持する工夫を一つ一つ獲得してきました。それは、地域の居場所においても同様でした。

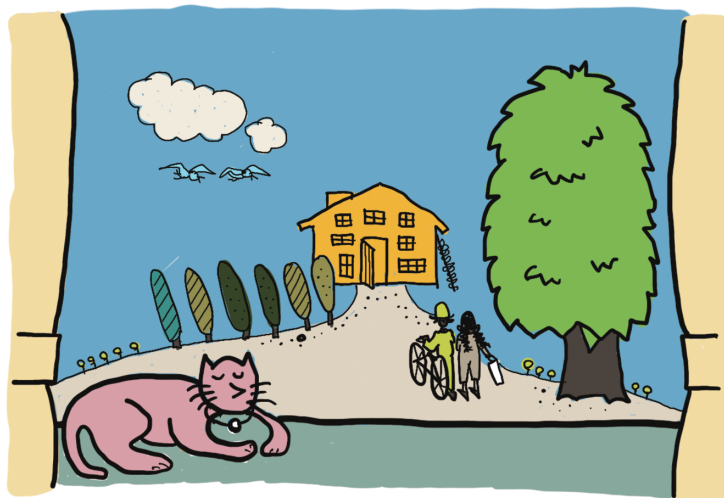
一時的に閉じた居場所では、手紙や電話、あるいはオンラインという形で利用者の方とのつ

ながりを保ち、また食事をともなう居場所ではお弁当や食材の配布にも取り組んでいます。一方、困難はあっても開き続けた居場所では、利用者の方をはじめ、スタッフや近隣などの関係者も含めて安心できる居場所の活動に最善を尽くしてきました。この

間の試行錯誤の経験は貴重であり、みなさんと広く共有し、その心構えや工夫を学びたいと考えます。

東京ボランティア・市民活動センター（以下、TVAC）は、これまでに地域の居場所に関する図書

を3冊、発行してきました。居場所の開設や運営についていづれも実践にもとづいて提案をまとめたものです。未だ終息しないコロナ禍において、居場所の活動をすすめることに戸惑いを覚える方も少なくないと思います。しかし、地域の居場所の大切さはコロナ禍でも変わらず、むしろその必要性はさらに増したと



実感します。

この冊子では、これまでのコロナ禍において、私たちTVACや地域の中間支援組織のコーディネーターのみなさんがどのように考え行動したかを振り返りながら、お伝えしたいと思います。

CONTENTS

- P02-03 ノート01 コロナ禍800日
TVACの行動記録
- P04-09 ノート02 地域の居場所を支援する
コーディネーターは、
どう行動したか
ボランティアフォーラム
TOKYO2022分科会14より

- P10-11 ノート03 コロナ禍の居場所 感染対策のきほんのき
『新型コロナウイルスの影響下における、
地域の居場所の大切なポイント』
2020.07より抜粋
- P12 ノート04 コロナ禍を経て、変わらないこと・変えること。
～未来につながる地域の居場所に向けての
メッセージ～

コロナ禍800日 TVACの行動記録

新型コロナウイルスの感染拡大からおよそ800日。この間、TVACでは初めて直面する事態の中で、ボランティア・市民活動を支える方法を模索し続けてきました。ここでは2020年度を中心に、地域の居場所づくり関連のTVACの動きを整理しています。

2020

●コロナ対応スタッフ全員ミーティングを開催(3月～)

新型コロナの感染拡大が深刻となり、TVACの開館や職員の出勤にも影響が出る中、今しなければならぬことは何か、スタッフ全員で毎週ミーティングをして考えていくことに。まずは活動団体の状況はどうなのかを知ることから始めました。

●「新型コロナウイルス感染拡大の影響アンケート」調査(4月)

新型コロナの感染拡大防止への対応について、居場所活動を行なっている団体に向け緊急のアンケート調査を実施しました。

●ボラ市民ウェブによる情報提供(5月～)

感染拡大の中で活動している団体、活動に困っているNPO、ボランティアに向けて役立つ情報(NPOの運営支援情報、NPO法人の手続き、助成金・給付金・寄付集め、活動のアイデアや工夫など)をTVACに寄せられる相談をもとに収集しウェブで特集して情報提供を始めました。

●新型コロナの中でのボランティア・市民活動 参考事例集(5月)

アンケート調査の結果を参考にしながら、感染拡大を防止するために活動を変えたり、感染防止に取り組みながら開いている居場所など、活動団体が参考になる取り組みの事例をまとめボラ市民ウェブで情報提供をすすめました。

●居場所づくり中間支援組織の情報交換会(5月)

各地の居場所づくり活動や居場所の運営について、どのような状況か、感染対策はどうか、工夫や課題について、都内5団体7名の中間支援組織スタッフとオンラインで情報交換。交わされた情報をもとに、地域の居場所運営の工夫についてまとめ公開することにしました。

●新型コロナに関するスタッフ勉強会の開催(6月)

新型コロナと感染対策を正しく理解するために、まずはスタッフからということで勉強会を開きました。

●ゆめ応援ファンド特別助成の実施(6月～)

通常の助成金とは別に、新型コロナの影響を受けた団体に対して、感染対策やオンライン対応、団体の運営費用不足に充てられる特別助成を財源確保し実施しました。

●東京都生活文化局への提案(6月)

TVACに寄せられた活動団体からの相談をもとに、NPO法人の運営や届出に関する東京都の対応について要望・提言をまとめて所管課に伝えました。

●「地域の居場所の大切なポイント

～地域の中で、つながりを保ち続けよう～(7月)

5月の情報交換会で出し合われた工夫に、公的機関や活動支援団体が公表している情報を集め、冊子にまとめて公開しました。【▶P10-11】

社会の主な動き

- ▶ 1/16 国内で初めて感染確認
- ▶ 3/11 WHOがパンデミックを認定
- ▶ 3/25 週末の不要不急の外出自粛を要請(都知事)

回答154団体。
9割超の団体が「活動を縮小した」。

- ▶ 4/7 7都道府県に緊急事態宣言(1回目)(4/16に全国に拡大)

- ▶ 4/24 全国の小中学校高校の9割が休校(文科省)

“いま、できる活動って?”
5つのヒント
17の事例を紹介。

- ▶ 5/25 全国で緊急事態宣言の解除

75件、総額約600万円。
毎年の助成規模(1年分)に相当。

●「新型コロナウイルス影響下でのボランティア活動について」(7月)

夏のボランティア活動体験が始まる時期に合わせて、感染防止とリスク管理の点から、「活動先(施設・団体)に配慮していただきたいこと」「ボランティア希望者に心がけていただきたいこと」をまとめ、「活動に関する合意書」の書式例もつけて公開しました。



www.tvac.or.jp/news/50522

●地域の居場所づくり研究委員会の開催(8月)

コロナ禍の前から定例的に開催されていた委員会を再開。居場所づくりをすすめる中間支援組織として何に取り組んでいけばよいのか、意見交換をしました。



www.tvac.or.jp/news/50523

●「新型コロナウイルスとボランティア・市民活動

～無理なく、活動を続けるために～(8月)

活動の再開や存続について迷ったり悩んだりしている団体が多くあることを受けて、この機に思い切って休止や終了することの意味や意義、新たな可能性について考え、捉えていくことを呼びかける文書を公開しました。



www.tvac.or.jp/news/50530

●「地域の居場所の衛生管理を確認しよう

～新型コロナ感染対策オンライン勉強会～(9月)

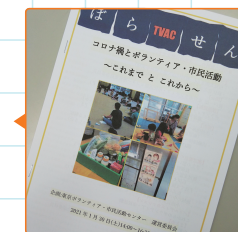
正しい感染対策を知って活動につなげるため、居場所活動団体を対象に、医薬化粧品産業の労働組合の協力と協働により勉強会を開催。オンラインツールの使い方や使いこなし方の学習を兼ねた会に。

●民間助成団体へ助成の提案(9月)

助成財団など民間助成団体が参加する勉強会を開催。居場所活動団体の活動状況や活動事例を紹介する中で、活動上の課題や悩みを伝え、積極的な助成を通じた支援を提案しました。

●TVAC運営委員会主催による「シンポジウム」の開催(1月)

「コロナ禍とボランティア活動～これまでとこれから～」と題したシンポジウムを開催し、ボランティアと感染症予防、TVACの調査と取り組み、居場所を含む各活動現場からの提起などを受け、「これからのボランティア・市民活動」について社会に発信しました。



2021

●市民社会をつくるボランタリーフォーラム TOKYOの開催(2月)

居場所づくりを推進する中間支援組織スタッフが実行委員となり、分科会を企画。テーマ「コロナ禍での居場所づくりの現在地～高齢者の交流の場を対象に～」にて、参加する活動者・一般市民と討議や情報交換し、成果を報告書にまとめて発信しました。

●夏のリモートボランティアプログラムの実施(7月)

1980年から毎年、地域のボランティア・センターと連携して実施してきた、「夏の体験ボランティア」キャンペーンを、「夏のリモートボランティアプログラム」として実施。プログラムで子ども食堂(子どもの居場所)で提供するメニューのレシピを考える活動を募集。多数の応募・参加がありました。



2022

●市民社会をつくるボランタリーフォーラム TOKYOの開催(2月)

居場所づくりを推進する中間支援組織スタッフの実行委員により、分科会「コロナ禍での居場所づくりの変容～外部支援者から見た居場所づくりの現状と課題～」が企画・開催されました。【▶P04-09】

地域の居場所を支援するコーディネーターは、 どう行動したか

市民社会をつくるボランティアフォーラム
TOKYO 2022分科会14より

ボランティアフォーラムTOKYO 2022の分科会14では、3人のコーディネーターからそれぞれの地域の居場所の状況が報告され、コロナ禍での活動の工夫が紹介されました。これは記録を再編集したものです。

開催日時 2022年2月12日(土) 16:00-18:00
開催 オンライン
出演 山田翔太 世田谷トラストまちづくり(以下「トラまち」)
稲葉隆裕 荒川区社会福祉協議会(以下「荒川社協」)
関 真弓 都市住宅とまちづくり研究会
(以下「としまち研」)



やまだしょうた
山田翔太

トラまちで住民活動によるまちづくりをサポートするコーディネーターとして活躍。



「トラまち」では、建物のオーナーが自分の住んでいる家や所有する空家を地域に開放して行く「地域共生のいえ」というまちづくり活動を支援しています。

※参考「地域共生のいえ」について
<https://www.setagayatm.or.jp/trust/map/ie/>

コロナ禍で、支援している居場所では、、、

地域共生のいえでは、どの居場所も一旦閉じる経験をしました。

•未経験のオンライン開催にトライ!

「あばら屋 春夏」は、介護者が集う居場所です。オーナーがご家族の介護を長年自宅ですれた経験から、同じように介護者が思いを吐き出して、ほっと一息つける場が必要と、月一回ちゃぶ台を囲んできました。コロナ禍をきっかけに、オンラインでつながることに挑戦されました。元々はガラケー使用者でしたが猛

勉強され、参加者も年齢が高いのですが、回数を繰り返すうちに慣れてきて、現在はオンラインでつながりを継続しています。

•会食から配布へ。電話相談を始めたところも

「ぬくぬくハウス」では、1回に70人も集まる子ども食堂を開催してきましたが、コロナ禍で食材配布へ切り替えました。多量の食材はかさばるので保管場所に困り、小分けされていないと配りにくく、会食の方が楽だったそうです。

「きんしゃい」ではコロナ禍で不安を抱えていたり、困っている人々が増えていることを危惧し、電話での相談受付を始めました。どのような状況でも閉じることなく、つながり方を柔軟に変えた事例です。

「きんしゃい」の
でんわ
そうだん

これまで自宅の一室をひらいておしゃべりの場を設けてきましたが、感染症予防のためお休みしています。その代わりに電話相談を受け付けることにしました。

私、米屋は更生保護に長年関わり、刑罰を終えた方の社会復帰のお手伝いをしてきました。10代の頃は俳優をし、その後ファッションの仕事に関わり、会社の経営もしてきました。結婚は2度、夫・娘との死別も経験しています。

人との交流が難しい世の中になりました。世間話のようなお気遣いおしゃべりから人生相談まで何でもお受けします。ひとり悩まず、お電話ください。75歳を迎えた私の経験がお役に立てれば幸いです。

きんしゃい (米屋)
電話 住所 世田谷区下馬4丁目

*番号を通知の上お電話ください

•閉じたことでわかった「必要としている人」。参加対象を少し制限して再開

多世代が集う、まちのお茶の間「岡さんのいえ TOMO」は、1回目の緊急事態宣言時は一旦閉じました。その間も家の手入れをしていると、活動がないことを知っているのに様子を見に来て話していく人がいて、「やっぱりこの場所は必要だ」と再認識したそうです。そこで、「誰でもどうぞ」から「近隣の方や、今まで通っていた方にどうぞ」と少し制限をかけ、開ける度合いを調整しながら継続しています。

コロナ禍で感じたこと

トラまちでは、オーナーへのアンケートやオンラインお喋り会を開催し、状況把握をしました。「強制的にストップさせられることで内省の機会が得られた」との感想を持ったオーナーが多かったです。

•私有空間は小回りが利く一方、生活空間

コロナ禍で公共施設は利用制限されましたが、私有空間は自分たちで判断しながら活動を継続したところもあり、小回りが利いて機能すると実感しました。一方で、「地域共生のいえ」は「オーナーの生活空間」である場合が多く、オーナーの生活を守りつつ住まいをどう地域に開いて行くのが悩ましいところでした。

•多様な考え方を認め合う大切さと、合意形成の難しさ

感染症に対する考えは人により違い、「この時期に活動するのはもってのほか」という意見や、「こんな時だからこそ必要」という意見もあり、合意形成が難しいのを見てきました。これまで居場所では多世代交流が良いものとされてきましたが、若い世代に感染拡大した時期には、年配の人が「若い人は怖い」とおっしゃることもあり、それも当然な反応だと思います。私もオーナーも、人それぞれ違う意見があることを理解すると同時に、一歩退いて俯瞰してみることが重要だと思いました。

•2年余りのコロナ禍を経て、交流への渴望!

実は最近になって「地域共生のいえ」をやりたいという人が増えています。社会交流が制限されてきた反動なのか、交流の大切さを実感しているようです。

いなばたかひろ
稲葉隆裕

荒川社協で長年「地域福祉コーディネーター」という役割で居場所づくりにかかわる。



私の勤務する「荒川社協」では、平成15年度から高齢者や子どもの居場所活動「ふれあい粋・活サロン」に取り組んでいます。

※参考「荒川区ふれあいいきいきサロン」について
http://www.arakawa-shakyo.or.jp/service/hureai_ikiiki_salon.html

コロナ禍で、支援している居場所では、、、

荒川社協では、サロン再開を後押しする支援をしてきました。

•テーマ型活動は、早い再開

運営主体や活動内容などから、サロンを3つのグループに整理しています。1つ目は地縁型。町会や高齢者倶楽部など、地域に根ざしたキーパーソンを中心に活動をしています。2つ目は公共施設型。コミュニティ施設や高齢者福祉施設の運営法人が地域に根差す活動をしたいと、ホールなどを地域に開放した活動です。3つ目はテーマ型。さまざまな問題意識を抱えている人たちが、いろいろな形で活動しているボランティア活動です。この3つの中で、テーマ型活動は再開が早かったです。地縁型で公共施設を利用している活動は行政との関係が強く、行政から自粛の要請があると従わざるを得なかったのですが、それに比べてテーマ型の活動はそのような縛りがあまりなかったからだと思います。



・再開に向けて、支援者が行った情報収集

一番参考になったのは、「独立行政法人 製品評価技術基盤機構 (NITE)」の製品情報でした。界面活性剤が効果あることや、フェイスシールドやマスクの製品について、ここから情報を得ました。また、歌声活動には「一般社団法人 全日本合唱連盟」のガイドラインを参考に、再開するにはどうしたらいいかを活動者と一緒に考えました。

活動のリーダーたちは行政との板挟みになったり、どの情報を頼たら良いか迷ったり、より短時間で密にならない工夫を考えたりと大変でしたが、新たな実施方法について関係者と合意ができたところは迅速に再開ができました。

・屋外の活用、各家への訪問、配食などの工夫

「常時換気より、むしろ屋外での活動の方がいいのでは」と、屋外スポーツに取り組む町会もありました。家にいる時間をより有意義に過ごしてもらおうと、「サロンで配っていたプリントを各家へ配る」ことに取り組んだ町会もあります。そこには、スタッフが顔を合わせて近況報告をしたいという裏目的もありました。いずれもこうした活動でスタッフも会員もつながりを継続できました。

また、会食会を行っていたところは、お弁当に切り替えて配達するところもありました。



コロナ禍で感じたこと

コロナ禍になったことで特段スタンスを変えたことは無いと思っていますが、活動のリノベーションが必要だったかなと考えています。

・個々のリーダーに寄り添うコーディネート

活動のリーダーご自身の体調が悪かったり家族に持



病があったり、あるいは「自分が感染していたらどうしよう」と悩みながら活動されていました。より一人ひとりのリーダーたちに思いをいたす、そういうコーディネートをしたと思います。

行政からの指導の影響力が大きかったので、ネットワークを組み「社協と一緒に取り組むので、再開しませんか」と呼びかけました。中間支援組織として、地域活動の火を絶やさないために「風よけ」になったり、場合によっては再開するまで自分たちが「種火」となって活動に必要なさまざまなことを継承する、そういう覚悟を持って臨んだ感じがします。

・滞在型ではない、つながりづくりの創出が大切

今までのような、みんなで一か所に集まって交流するという滞在型は、今後は難しくなるのかもしれない。最悪の状況も念頭におき、滞在型ではないつながりをいかにつくっていくのか。一人ひとりのつながりや役割をどのように創出するかに重点を置いた活動が、今後大事になってくると思っています。中間支援組織の役割は、今後も非常に高くなってくると考えています。



としまち研副理事長。千代田区神田を拠点に多世代が住み続けられる住まいづくりを展開。



千代田区神田は昭和30年ごろまで職住一体のまちでしたが、その後の高度成長期やバブル期を経て事務所オフィス街となり、「都心の過疎化」と言われるくらい住む人がいなくなりました。私が活動する「としまち研」では、もとの地主さんと、「神田に住みたい人たち集まってください」と募集して、応募してきた人たちが事業主体となって建設するコーポラティブ方式の住まいづくりに取り組んでいます。

※NPO法人都市住宅とまちづくり研究会

<https://tmk-web.com>

コロナ禍で、支援している拠点では、

コロナ禍以前、若い世代や子どもが地域に増えた結果、「日本の文化を伝えたいよね」と、餅つき大会や35年ぶりに「夏のラジオ体操」が復活していました。こうした活動が全てストップしました。

・屋外活動からスタート ラジオ体操

屋外空間だったらいいかなと、夏休みのラジオ体操から再開しました。町会青年部の人たちが前の晩に、路面に2m間隔で印をつけてくれました。学校行事も中止していたので子どもたちが大勢参加してくれて、そうすると高齢者も大勢来て「みんな元気で良かったね」とふれあいの場にもなりました。



・屋外で町の写真コンテスト展示

また町会青年部のアイデアで「私の町の写真コンテ

スト」が実現しました。最初は「ホームページ上でやるか」という意見もあったのですが、メイン通りに展示することになりました。

立ち止まって見てくださる方や、たまたま久しぶりに会った人々が盛り上がっていることもありました。



コロナ禍で感じたこと

基本は人と人のつながり、日常からのお付き合いが大切だなと、コロナ禍を経験して改めて思います。

・何かが起きてからでは、できない

ラジオ体操や町での写真展示などは、以前からのつながりがあるからこそできたことです。

・1ヶ所に大勢ではなく、少しずつつながる

「居場所をどこかにつくらなきゃいけない」と思っていました。多くの人が同じ場所に集まらなくても、少しずつ関わりあいをつくっていくことで、居場所があるのと同じことができるのかなと思っています。今、マスク姿ですれ違ふと「あの人かな?」と知りあいかどうか判断できずにちょっと不安になることもありますよね。そんな時も、元気よく会釈だけでもすると「お互い元気で良かったね」を確認でき、明るい気分になります。まち全体が居場所になっているのかなと思います。

・情報発信の大切さを改めて実感

世代により情報収集の仕方の特徴があるので、複数の方法で行うことが大事なかと、コロナ禍を通じて思いました。複数の方法での情報発信は、ちょっと大変になるのですが。

情報を得る方からすると、ここに行けばこういうことが分かるよねという「拠点」がわかっていると、心のよりどころというか安心感があると思います。

参加者からの質問

Q & A

Q コロナ禍での居場所。コーディネートのポイントは？

▶ **活動目的、参加対象をもう一度一緒に考える**
活動が一旦停止したのを良い機会に「そもそも何でこの活動を始めたか」「参加してもらいたいのはどんな人か」をもう一度一緒に考える作業がとても大事でした。ある意味ゼロから考えるより難しかったです。既にできあがっている活動を一度壊し、骨格だけ残して再構築する作業です。この作業を、運営リーダーだけでなくスタッフ全員で合意形成していくことが大変でした。【稲葉】

▶ **目的の達成手段は変わっても、目的は変わらない**
「コロナ禍より前に戻さないと」と考える人はいましたが、「変えて行けるところは変えよう」と提案しました。目的の達成手段は変わっても、目的はそう変わりません。例えば、子ども食堂は会食を中止しましたが、食事の配布をすることで、食の貧困へのアプローチは変わらずできているのです。【山田】

▶ **できる方法で取り組む**
コロナ禍で、毎年行っていた敬老の日のお祝いの手渡しができなくなり、一人暮らしの高齢の方の状況把握が町会でできなくなりました。直接の訪問はできなくても「町会は動いている、は伝えたい」との声は多く、ラジオ体操やまちでの写真展示へと展開しました。目的を確認しながら、できる方法で取り組むことが大事だなと感じました。【関】

▶ **雑多な情報の中から正しい情報を選り取り、どうして行くかを一緒に悩む**
コロナ禍以前は、活動リーダーのみなさんは活動が身に付いていて自然に動いていましたが、コロナ禍では不安が先立ち戸惑われていました。中間支援組織としては、「巷に溢れていた雑多な情報の中から正しい情報を選びとって地域の方に伝え、どうして行くかを一緒に悩む」、という作業が大事だったと思います。【稲葉】

Q 家から出られない人へのアプローチは？

▶ **区と連携**

東日本大震災の時、区と町会とで連携して高齢者の安否確認ができるようになりました。また個人的なネットワークによる状況把握もしています。それでも届かない方へは今後の課題です。【関】

▶ **コロナ禍以前の問題**
コロナ禍以前の問題が、コロナ禍でより顕在化した感じです。ひきこもりの当事者と家族が集まる会の支援をしていましたが、コロナ禍になって参加できなくなった方が増えました。なぜなら、目に見えないものに対して特に敏感で恐れを感じている人もおり、県外から来ている人は電車での移動が困難になりました。元々参加しにくい方々は、新たな取り組みにはなかなかつながらなかったです。【稲葉】

Q 大学との連携、若い社会人との関わり方は？

▶ **多文化交流**
居場所で干し柿づくりをしたことがあります。コロナ禍で在宅勤務になった人も多く、その中に子育て世代の外国人もいました。「日本の食文化を勉強したい」と参加された後、恩返しをしたいと、母国の食べ物であるスコーンをつくってくれたことがあります。【稲葉】

▶ **子どもや若い人が活躍する場づくり**
ラジオ体操の見本として前の台に立つ役や、イベントでテントを組む手伝いなど、大人たちに混じりながら子どもと一緒に活動してくれました。また、大学生にはおみこしを担いでもらったりしました。地域の大人は大歓迎で「地域に入らってこんな楽しいんですね」という感想をもらう経験してもらっています。【関】

「地域共生のいえ」では、学生が研究対象とすることが多く、研究時は運営にも関わってもらうこともあります。就職後は東京を離れる人もいて、実際訪ねることはできないけれど居場所があり続けることで心の拠り所になっている人は多いと思います。仕事が落ち着いた何年後かに「ああ、あの時の学生さんが」と見かけることがあります。何年経っても「これやってみない?」と持ち掛けると、つながりが復活するのではと思っています。【山田】

クロス×トーク

お互いの話を聞いて

住みながら地域と交流できる重要性

稲葉 関さんのお話を改めて伺って、コーポラティブハウスの活動がとても素晴らしいと思いました。僕は地元の町会役員もしていますが、町会の長老たちはひとり暮らしの方が多いです。第一線を退くと、一気に人とのつながりが切れてしまって孤立するので、暮らしの中でいかにつながりを維持できるかが大切だと思っています。

山田さんが支援している「地域共生のいえ」のように、住んでいながら地域の方と交流ができる活動、関さんの事例のような一緒に共同の住まいをつくっていく取り組みは、コロナ禍に関係無く、すごいヒントをいただいたと思います。

山田 囲碁の会をやっている居場所のオーナーは90歳近くて一人暮らしなのですが、身体能力がちょっと低下してお茶出しが難しくなってきたのですが、周りの人が勝手にお茶碗を洗ってくれるようになったので、「私死ぬまでできます」っておっしゃっていました。身近な空間で交流することの最終的な目標は、自分が弱っても外に出ることが難しくなっても、交流を継続することかなと思っています。

社協の立ち位置は？ 行政とのパイプが強い民間法人

関 稲葉さんは社協という公的な立場ですが、社協の立場としてちょっと辛いとか、こうなるともって地域に入りやすいとか、裏話が何かあれば教えてください。

稲葉 社協って社会福祉法人という民間法人ですが、地域では必ず「区の人でしょ」と言われます。これは非常に辛いです。区の苦情を言われることも多く「今度伝えておきます」とお伝えするのですが、そういう意味でもパイプ役です。

コロナ禍では、地域活動を地域住民と一緒にやっていく流れを止めてしまったら使命を果たせない、住民の主体性をどう維持できるかが最大の課題でした。自粛要請も出ていますが、地域にそのまま伝えてしまっていないのか。地域のみなさんが意気消沈し

て「ちょっとできないよね」と話しているのであれば、社協が「暫くお休みしましょう」と言いながらも、活動の精神やノウハウとなる“種火”的な部分は僕らがしっかり守って行く気持ちでした。そこで、正しい情報を収集しガイドラインを示しながら倒れないように支え、タイミングを見て「そろそろこの感じのやり方はどうでしょう」と持って行くのです。行政は「やっていい」とは言わないです。地域の方の主体的な活動を社協としてどう支えるか、言い方を悩みながらお付き合いしてきたという経緯があります。

山田 もっとお話ししたいところですが、最後に居場所関係者にメッセージをお願いします。

関 真をついたご質問ばかりで、私たちも真剣に考え実践につなげて行きたいなと思うところです。ただ私は抱え過ぎるきらいがあります。そこでメッセージとしては、一人で背負い過ぎない、役割分担をこまめに、みんなで楽しく取り組んで行くことを大事にしていただけたいと思います。

稲葉 伝えたいことが2つあります。1つ目は関さんのお話にもあったように、一人で抱え込まないことは大切です。ネットワークを組むことで、例えば「社協が言うからやってみようか」とかお互いに支え合いながら活動を継続できる場所があると、これからの時代は一層ネットワークが大事、協働や多機関の連携が大事になると思っています。

2つ目は、支援者の勤務先の法人理念があると思うのです。その理念をどう活かして行くかも大事です。社会福祉法の改正が令和3年4月から施行され、ひきこもりなどの社会参加をどうするかが法律の中で言われており、中間支援組織として居場所づくりの中でどう取り組むかにつながっていきます。高齢者や障害者に関連する機関が居場所づくりに参入してくると思いますが、中間支援組織が留意しなければいけないのは、仕事の実績を積むために、地域の活動を利用するという考えやスタンスではなく、あくまでも地域の主体性があり、その背中を支えたり押しつたりする役割として取り組んでいくことが大事だと改めて思っているところです。

僕自身も今、障害者施設に勤める立場で拠点を持っていますから、この拠点をどう地域に活かして行くかと考えているところです。

コロナ禍の居場所 感染対策のきほんのき

『新型コロナウイルスの影響下における、地域の居場所の大切なポイント』2020.07より抜粋

2020年春、感染が急拡大する状況をふまえ、TVACでは地域の中間支援組織のコーディネーターと情報交換を行い、同年7月『新型コロナウイルスの影響下における、地域の居場所の大切なポイント』をまとめ発信しました。2年が経った今も、あらためて大切にしたい事項と考えています。一部情報を更新して掲載します。

活動に臨む前に考えたいこと

ポイント1 新型コロナウイルス感染症を知る機会をつくらう

知っておきたいこと

- ・新型コロナウイルスとは？
- ・どんな症状がでるのか？
- ・どのようにして感染が広がるのか？
- ・重症化のリスクの高い人
- ・感染を予防するためにできることは？
- ・感染の疑いが生じた場合、どのように行動するのか？

ポイント2 「今」の感染状況をふまえて、活動の進め方を判断しよう

確認しておきたいこと

- ・東京都のロードマップのステップ
- ・周辺地域の感染の広がりや状況(区市町村のホームページなどから)
- ・自治会など地域活動や、他の居場所の開催状況
- ・公共施設を会場にする場合には該当施設の使用ガイドライン
- ・個人の家を会場にする場合にはオーナーの意向
- ・居場所の活動において考えられる感染リスクと、そのための感染予防対策
- ・もしも、感染の疑いのある人が生じた場合の連絡先

活動中に感染しない、感染を広げないための対策／準備編

ポイント3 会場は事前に確認しよう

確認しておきたいこと

- ・会場の広さ
- ・換気の方法
- ・会場や物品の消毒の方法
- ・体調不良を訴える人が発生した場合の対応方法

ポイント4 感染予防をふまえて、プログラムを見直そう

プログラムを見直す際のヒント

- ・人数制限や時間の短縮、2部制での開催など
- ・人の離隔の確保
- ・効率的な換気
- ・屋上やテラスなどの屋外の活用
- ・物品を共用しない工夫
- ・飲み物は持参、食事やお菓子などは個別包装
- ・換気や休憩時の手洗いを想定した時間割
- ・活動終了後の会場内の消毒時間の確保

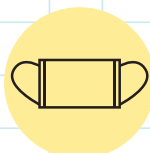
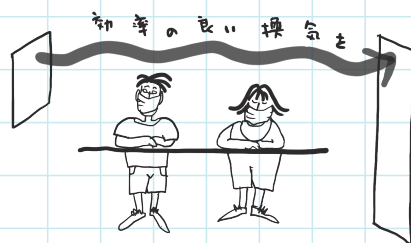
ポイント5 感染を予防するための物品を用意しよう

用意しておくといもの

- ・手指や施設内の消毒液
- ・拭く紙
- ・手袋
- ・予備のマスク(不織布)
- ・飛沫防止用アクリル板

ポイント6 運営スタッフの備えを確認しよう

- ・運営スタッフは健康管理を万全に(ボランティア保険に加入など)
- ・感染予防に対する共有認識を(チェックリストを作成して共有するなど)



ポイント7 利用者・参加者に事前にお知らせしよう

事前にお知らせしておきたいこと

- ・感染対策に努めるため、これまでと異なる点や制限があること
- ・濃厚接触の疑いや体調に違和感や不安がある時には、参加を見合わせてほしいこと
- ・活動中の咳エチケット、手指の消毒、マスク(不織布)着用をお願いすること
- ・上履きなど個人使用のものは、持参してもらうこと
- ・万が一、会場内が予定より多数になった場合には、入場を断る場合もあること

活動中に感染しない、感染を広げないための対策／活動編

ポイント8 活動を始める前に

- ・会場内の消毒
- ・活動中の動線を確認し、飛沫防止用アクリル板や扇風機などの設置
- ・感染対策の手順のシミュレーション

ポイント9 開始時、特に注意すること

- ・受付時など、密になりやすい場を気をつける
- ・配布物は手渡しをしない
- ・体調の確認や検温、手指の消毒

ポイント10 活動中は声を掛け合って対策を

- ・こまめな手指消毒やできるだけマスク着用、接触や大声を避けるなど、参加者全員で感染対策を共有する

ポイント11 終了時の注意点

- ・人が集中しないよう、時間をずらして退出
- ・運営スタッフ間で感染予防対策について振り返る
- ・参加者の退出後、会場内や使用物品の消毒

活動の縮小や休止の間のできる工夫

ポイント12 地域の中で、つながりを保ち続けよう

- ・「今」の感染状況をふまえ、健康リスクが高まった時にはみんなで話し合い、活動の縮小や休止を含めて活動の進め方を判断する
- ・その間も、地域の中でのつながりを保ち続ける

新型コロナウイルス感染症について：厚生労働省

https://www.mhlw.go.jp/stf/seisakunitsuite/bunya/0000164708_00001.html

新型コロナウイルス感染症対策サイト：東京都

<https://stopcovid19.metro.tokyo.lg.jp/>

特設サイト 新型コロナウイルス：NHK

<https://www3.nhk.or.jp/news/special/coronavirus/>

新型コロナウイルス感染症市民向け感染予防ハンドブック[第2.2版]：東北医科薬科大学病院

<http://www.hosp.tohoku-mpu.ac.jp/info/information/2326/>

新型コロナウイルス感染をのりこえるための説明書：諏訪中央病院

<http://www.suwachuo.jp/info/2020/04/post-117.php>

新型コロナウイルス感染症にかかる相談窓口について：東京都福祉保健局

https://www.fukushihoken.metro.tokyo.lg.jp/iryo/kansen/corona_portal/soudan/coronasodan.html

ボランティア保険：東京福祉企画

<http://www.tokyo-fk.com/volunteer/volunteer.html>

地域の通いの場の再開に向けた新型コロナウイルス対策ガイド：東京都健康長寿医療センター

<https://www.tmgig.jp/research/release/2020/0529.html>

新型コロナウイルス関連のガイドライン：認定NPO法人全国災害ボランティア支援団体ネットワーク(JVOAD)

<http://jvoad.jp/guideline/>

新型コロナウイルス対策緊急プロジェクト特設ページ：NPO 法人全国こども食堂支援センター・むすびえ

<https://musubie.org/corona/>

新型コロナウイルスの下で“つながり”をあきらめない地域福祉・ボランティア活動交流サイト：未来の豊かな“つながり”のための全国アクション

<https://tunagari-action.jp/>

新型コロナの中でのボランティア・市民活動 参考事例集：東京ボランティア・市民活動センター

<https://www.tvac.or.jp/corona/jireisyu/>

コロナ禍を経て、変わらないこと・変えること。

～未来につながる地域の居場所に向けてのメッセージ～

東京ボランティア・市民活動センター 所長 山崎美貴子

1

1つ目は、直接人と会って一緒に過ごす場は、やはりとても大切なのではないかとことです。

オンラインの便利さに慣れてきた一方、画面を通さずにおしゃべりや食事を共にする時間を過ごす中で得られる安心感や信頼感や楽しさといったものは、私たちの日常生活にとってかけがえがない経験だということを改めて感じています。

コロナ禍の影響が長引き、小さい子どもにとっては、マスクを外している人に出会うと不安を感じたり、話しながらの食事に違和感を感じる子どもが増えていると聞きます。非日常が日常になりつつあるのです。

「気軽に一緒に過ごす」という、コロナ禍以前のような状態を取り戻すには、まだ時間がかかるかも知れません。しかし、「人が集う場づくり」は、変わらず求められていること、日常の中にある大切なこととして、いかに継続していくかが今後も大きな課題です。

2

2つ目は、1つ目と相反するようですが、物理的に集う場がなくても「つながり」を感じることができた工夫や経験を蓄積し、活用することです。

例えば、手紙で気持ちを伝えたり、会食ができなくてもお弁当を届けることで様子を確認しあったり。まちなかで「まちの写真展」を開催したところ、見学している人がいてまちへの興味を共有したように感じて嬉しかったり、久しぶりに知り合いに出会う機会が生まれる場になったりしました。

元気に活躍されていた高齢者が、体力の衰えをきっかけに活動に参加する気力をなくしたり、他の人に迷惑をかけまいと参加を遠慮したりして、引きこもりがちになることが課題でした。コロナ禍で新たに獲得した「集わなくてもつながりを感じる」工夫は、集う場に行けなくなった方々とも「つながることができる」方法として活用が期待されます。

3

3つ目は、中間支援組織のコーディネーターの経験を、将来に生かしていくことです。

当初、新型コロナウイルスは未知のウイルスで、何をすればいいのか何をしてはいけないのかが、全くわからないものでした。それでもこの2年半余りの間、私たち、中間支援組織は現状の把握に努め、信頼できる情報を集め、今できることは何かを話し合い実行してきました。このプロセスそのものが、今後震災などの災害が起きた時にも役立つと考えています。

どのような時も市民活動に関わり支援し続け、その場その場で臨機応変に、どうするべきかを市民のみなさんと一緒に工夫と知恵を持ち寄り問い続けることが、中間支援組織の役割だと改めて確認することができました。未来にも向けて力を活かしたいと思います。